

古高取通信

No.17

平成26年7月

古高取を伝える会会報

直方の高取焼



目次	
平成二十六年度 定期総会	2
古高取の魅力を伝える	2
古高取紹介	3
内ヶ磯窯開窯四百年に向けて	4
窯元紹介	5
活動の記録	6
古高取の広場	6
なんでも掲示板	8

「内ヶ磯窯開窯四百年を迎える」

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が始まり、黒田家ゆかりの史跡に関心が高まってきました。

又、今年は、黒田藩の御用窯であり、古高取を代表する内ヶ磯窯開窯四百年になります。

本会では、内ヶ磯窯跡の出土品を中心とした展示会や、黒田藩ゆかりの地を訪ねるバスツアーなどを企画しており、「古高取」を学び、広く市民に伝える活動を深めていきたいと思っています。

さらに、永年の懸案事項である「古高取資料館」については、関係団体と連携し「直方歴史民俗資料館」開設の運動を始めました。

皆で直方の誇りを確認し発信できる場が、早期に出来るように頑張っています。

隅田 知明

平成二十六年 定期総会

△平成二十六年五月十八日(日)▽
場所…直方市中央公民館三階

第三学習室

記念講演…亀井味楽氏

「陶工として生きる高取焼の魅力」

平成二十六年度の定期総会は、出席者が十九名、委任が二十八名でした。活動経過報告、決算報告、活動計画(案)、予算(案)について滞りなく承認いただきました。更に古高取の魅力を伝えるべく努力したいと思います。

新役員は次のとおりです。

会長	隅田 知明
副会長	鷹取 宗恵
理事	副島 邦弘
	永富 セツ子
	向野 志津絵
	柴田 ムツ子
	永富 準一
事務局長	末松 登志子
書記	倉田 豊子
会計	吉田 佳代子
監事	東 陽一
	田畑 恵美子

新任紹介

高取焼との出会い

古高取を伝える会

事務局長 末松 登志子

上頓野で育ち福智山登山も小学校の頃から何度かしました。ふもとの杉木立を歩くコースです。

当時は最大級の登り窯が存在していたことなど知りませんでした。直方が高取焼発祥の地で・・・

などと小学校で学習した覚えも、家庭で話題にする環境でもありません。

ダム建設が始まり、宅間窯開窯四百年祭の時、マイ茶碗作りが広報されており、お茶碗作りに参加しました。内ヶ磯友枝窯にてお手伝いもさせて頂きました。その時の感動の体験で今の自分があると思っています。

今年は内ヶ磯窯開窯四百年、幸いにしてテレビの官兵衛放送。

「古高取を伝える会」も今年は大忙しな年。平成二十年からの活動の上に今があります。

一過性のものに振り廻されることなく、地に足をつけて県・市教育委員会の発掘品、発掘資料にもとづきロマンを感じながら次世代につなげていきたいと願っています。お手伝い出来ることを幸せに思っています。



古高取の魅力を伝える

西新高取の亀井味楽さんをお迎えして

古高取を伝える会 副島 邦弘

平成二十六年度定期総会の記念講演として、筑前高取焼の東皿山を継承されている亀井味楽窯十五代亀井味楽正久氏お招きして、「陶工として生きる高取焼の魅力」という演題で講演をお願いした。

亀井味楽家は、東皿山の高取家の出で、西皿山職人中川家の養子に、高取家十一代久助寿泉氏の長男弥太郎氏がいり、明治御維新の時に亀井家を起された。高取家十二代は弥太郎氏の弟の徳三郎氏が継がれたが、若くして死去されたので、名跡の十三代を弥太郎氏が継承された。土管工場の経営をしながら、市議会議員としての公職にもつかれていたが、表千家の茶人岩井宗麟に諭され、これを機会に号を味楽として茶陶に専念され、亀井味楽十三代弥太郎と称され、十四代には孫の源八郎氏となり、平成十年に十五代に源八郎氏の嗣子正久が継承されて現在に至

っている。先代の源八郎氏は本年逝去されていた。

話は、スライドを使用しながら進められたので会員等には理解しやすくまとめられた。その内容は古高取と遠州高取の比較を中心に述べられていた。

味楽窯の現在地は福岡市早良区一丁目で、紅葉八幡宮の西北にあつて、旧早良街道と唐津街道の接点に位置する場所で、旧早良村にあたる。高取の西皿山の一部で、西皿山の職人陶工であつた中川家の窯場の位置である。窯は明治後半に改修されたのが現在の窯で、これが亀井味楽窯として今日まで伝わっている。窯の基底部は十八世紀初めに造られたものである。現在地は市街地になっているために窯で薪を焚くことができず、現在ガス窯で焼成しているということであつた。

古高取の内ヶ磯窯は織部好みを中心に焼き、遠州高取は飯塚の白旗窯で小堀遠州好みを焼いたもので、古高取の器壁は厚手のもの、遠州高取の器壁は薄づくりであつた。その特徴を映像で比較され説明を付された。

また、土づくりについての苦労話をされた。土（粘土）は太宰府の向佐野の土を使用していること

は文献に示されている。土取場が新興住宅地となり市街地化がはじまり土問題が表面化したので、集積場所を設定して、そこにダンブカーで土を運んで整地を行ったので、これで心配もなくなり孫の代まで大丈夫だと語られていた。映像で”博多文琳“を出して、神屋宗湛と太閤秀吉との同茶入めぐる逸話を話され、宗湛の方が一枚上手であつたが、その後黒田藩の二代藩主で忠之の時に黒田家所有となつている。また高取焼開窯四百年記念行事として、千人茶会を成功裏実施されたことに、古高取を伝える会を含め、市の行政当局を



取り込んでの行事を聞き、福岡市でも百一人の茶会を十月一日に実施したが、行政の予算化が遅れたことで、この程度で終わってしまつたことは残念であつた。韓国との技術交流を小石原・西新を含め、高取焼の技術の原点を求めるために韓国交流を深めてゆきたい。鼓窯を復興するために高取静山氏も十三代の味楽氏との交流があつたことを語られた。

味楽窯の後継者として息子さんが現在京都で修業中で、初歩の段階で一日中土もみ等で苦労していると、親として目が笑つて嬉しうに話された。

最後に技術論で茶入の底部が左糸切か右糸切かとの話では、いわゆる手廻しロクロと李朝陶工がもつてきた技術蹴ロクロとの工具の違いで、唐物（輸入品）は左糸切が多く、和物（日本製）は右糸切が多い。古高取の内ヶ磯窯期の茶入れには左糸切が多く見られ唐物写である。氏は中国に行かれて、竜泉窯の工房では底部の糸切痕は両方とも見られると語られていた。福岡市無形文化財としての亀井味楽窯の今後には土・人・釉薬等を含めて、物づくりは心技体の一歩化が必要であり継承することが一番重要であると結ばれた。



唐物茶入 銘 博多文琳
福岡市美術館 特別企画「大名茶陶-高取焼」展図録より

古高取紹介

【古高取内ヶ磯窯跡】

直方市頓野に所在する江戸初期の高取焼の窯跡。窯の立地する福智山一帯は筑前と豊前の境界線上に位置する。現在福智山ダムの湖底に保存処置して残されている。

慶長一九年（一六一四）藩主長政の命により、朝鮮陶工八三（高取八蔵）が永満寺宅間窯から移って開窯した。寛永元年（一六二四）藩主忠之の命により八三が山田村

に蟄居された後も操業されたことが現在理解されている。発掘調査の結果、窯本体の全貌と東側の物原および水田面に工房跡を検出した。

尾根線上を扇状に開削し、窯本体の周辺部には排水溝を巡らしており、当初から縄張りを行って築窯したものと思われる。また、窯の覆い屋跡と考えられる。窯尻近くの平坦地には選別所も設けられていた。窯は半地下式の階段状連房式登窯で、焚き口、窯尻を含む十五室からなる。全長四六・五mと長大で、焚き口は標高一三六・五mに設けられ、窯尻まで比高差は一六m、傾斜角は平均一九度。各室の大きさは幅二・三・二m、奥行二・七・三・二mで、平面形は台形をなしている。窯の中軸線は各室で異なり、焚き口から見る



直方市文化財調査報告書 第五集より

と窯全体がS字状を呈し、火の回りに留意したことが考えられる。

焚き口直下の前庭部に、窯の祭祀遺構と思われる二重円形状に組まれた石組みがある。工房跡からは粘土を漉したと思われる楕円形土壙、製作に使用するための粘土の溜まり、掘立柱建物や柵列などが検出された。出土遺物は大半が播鉢・片口・壺・瓶・小皿類の日常雑器で、上手物の茶入・香炉・水指・茶碗類など、茶道具の比率は少ない。茶道具のうち、茶碗類では織部好みの沓形茶碗が特徴的で、焚き口近くの二室からは五十個体にのぼる茶入の破片が出土した。肩衝・耳付など大小さまざまな茶入がみられ、その形態や器壁の厚さなどからいわず遠州高取とされる茶入も出土しており、白旗山窯より早い時期に遠州高取が焼造されていたことも確認された。釉薬は土灰釉・藁灰釉・飴釉・鉄釉・長石釉・銅釉が用いられ、技術的には高度な領域に達しており、銅釉（緑青）の完形に近い茶碗が出土したことも注目される。

副島邦弘

次回、「出土品」を紹介する予定です。どうぞお楽しみに！

内ヶ磯窯開窯四百年に向けて

今年度は内ヶ磯窯開窯四百年を迎えることとなり、我会では記念事業として次のようなことを実施して行こうと考えております。

【高取焼展示会】

高取焼発祥の地、直方市永満寺の地元にある福智山ろく花公園内において、高取焼の展示会を開催しました。

平成二十六年四月二十五日（金）

五月二日（金）

場所…福智山ろく花公園

【お茶室でおもてなし体験】

これまで直方市内の小学校六年生を対象にした子供焼物教室や地域対象の焼物教室で作った四千個以上のマイ茶碗を持ち寄った、おもてなし体験（お茶会）を行うものです。マイ茶碗をお持ちでない方でも当方で準備していますので、気軽に参加できます。

平成二十六年四月～平成二十七年

三月までの毎月、第三日曜日

※ただし、十月は中止です。

場所…直方歳時館
費用…三百円（一人）

風薫る五月。歳時館から眺める福智山を愉しみながらひとときを過ごしました。

あれこれ思案しながら手ひねりをして出来上がったマイ茶碗。久しぶりに手元に抹茶を一杯いただき、茶碗のぬくもりに癒されました。

茶の湯は、おもてなしの文化とよくいわれます。ここで利休道歌の一首を紹介します。

”茶の湯とはただ湯をわかし茶をたててのむばかりなる事と知るべし。”

ただお湯を沸かしてお茶を点てて飲む。簡単そうに聞こえますが、その中にいろいろな作法があり、お稽古を繰り返すことで作法が身につきます。「相手を思いやる心」「和敬清寂の世界」あわただし日々の中で静かなひとときを過ごし文化芸術に接することの出来る場、それが茶の湯のおもてなしだと思います。

毎月の歳時館の集まりで季節の薫りを一緒に愉しみませんか。多くの方々のご参加をお待ちしています。

田中紀子

【内ヶ磯窯開窯 四百年記念バスツアー】

黒田藩の御用窯である高取焼と黒田家ゆかりの地を巡るバスツアーです。

〈平成二十六年九月二十八日(日)〉

集合場所…直方中央公民館

費用…二千元(一人)

募集人数…四十五名

訪問先…小石原、秋月美術館、

円清寺(朝倉市)等

【内ヶ磯窯発掘出土品展と 記念講演】

黒田藩の御用窯としての古高取を多くの市民に知ってもらうため、数多くの出土品の展示会を開催するものです。

〈平成二十六年十一月〉

場所…直方中央公民館

費用…無料

記念講…(※講師の方は予定です。)

第一回 岸本圭氏

「内ヶ磯窯発掘調査の成果」

第二回 中里 太郎衛門氏

「古唐津について」

第三回 陣内 康光氏

「岸岳古窯の発掘調査の成果」

第四回 副島 邦弘氏

「高取焼開窯の謎を解く」

※詳細については、別途ご案内させていただきます。

窯元紹介

高取焼永満寺窯 清水 筑山



これまで九州の「やきもの」といえば、肥前の有田や伊万里に代表される磁器類が中心とされてきました。しかし茶の湯の世界に目を転じると、茶道を大変好んだ豊臣秀吉の時代、筑前高取焼は領主黒田長政が遠く朝鮮より連れ帰った八山父子によって鷹取山の麓、直方市永満寺に開窯、以来藩窯として茶道具のみならず日用雑器も数多く手がけ、後に江戸時代を代表する茶人、小堀遠州の好みを受け遠州七窯の一つとして珍重され

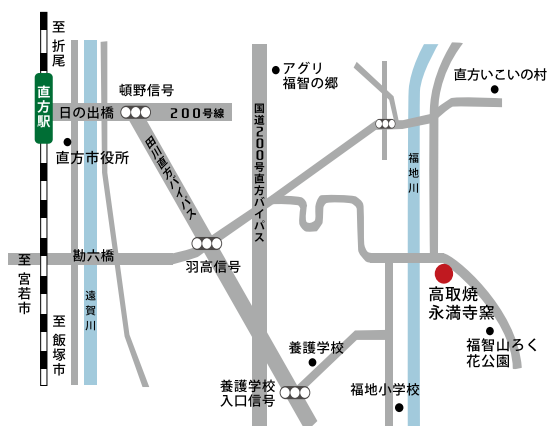
るに至ったのです。

高取焼は、高度な轆轤技術と精美な釉の使用によって洗練された装飾性を素直に打ち出し、その優美さは「きれいさび」あるいは「きれいわび」と表現されています。

当窯元は、高取焼発祥の地である直方市永満寺に窯を築いて五十年、作陶に適した土に恵まれて古高取・遠州高取の伝統を守りながらも、単なる伝承に留まらず、独自の釉薬、新たな技法や意匠を意識しながら、日々精進努力を重ねてまいりました。

これを機会に、筑前国陶高取焼をより深くご理解、ご愛用いただければ幸いかと存じます。

清水さんに話を伺った後、作品の一部を見せていただきました。その中に小さな子供くらいありそうな大きな花瓶があり、鉄釉耳付花瓶の内側に手が届くぎりぎりの大きさとのことで、制作に一ヶ月くらいかかったと話されました。また、内側に釉薬を掛けるのが大変だったと笑顔で話されました。お忙しいところ、ご対応いただきありがとうございます。



高取焼永満寺窯 清水 筑山
〒八二二-〇〇〇五
直方市大字永満寺二〇四五の一
電話 〇九四九-二二二七九



● 焼物教室部会

焼物教室の様子を少しだけ紹介致します。

「鞍手幼稚園 保護者会」
 〈平成二十六年六月七日(土)〉
 場所… 鞍手幼稚園



〈平成二十六年六月十日(火)〉
場所.. 感田小学校



● 民間版官兵衛プロジェクト

〈平成二十六年二月～二十七年三月〉

平成二十六年二月より発足。黒田家ゆかりの「直方」母里太兵衛（鷹取城主）で地域観光地作りを展開しています。

当会も発足当初から参加させて頂き、歴史パンフレットの内容作り、配布（活用方法）。現在はパンフレットにもとづいてガイドコースを作成中です。

●金剛山もとどり保全協議会だより

五月十六日（金）、総会を開催しました。平成二十二年に協議会が発足し人の手が入るようになり里山がそれに応えてくれています。「古高取を伝える会」は発足当初から会員になり相互に関わってきました。

【年間計画】

六月二十日(金)あじさい祭り
八月二十日(水)ちよくらふれ旅
(夏)くマイ茶碗作り・ソーメン
流し・川遊び



民間版官兵衛プロジェクト
で作ったパンフレット

母里太兵衛のパンフレットは市内公共施設等に置いてありますので是非、手に取って見て下さい。

福岡藩の御用窯「高取焼発祥の地」として掲載しています。

直方が五十二万石福岡藩の支藩（直方藩）として百年続いた城下町であったことを興味深く掲載しています。

末松登志子

古高取の広場

高取焼の薄作り

小山豆

高取焼は、茶匠小堀遠州の好みとして名高い筑前の国焼です。最大の特徴は、薄作りが現在にも伝わっていることで、この薄作りが、高取焼に登場するのは、筑豊のお



九月二十六日(金) 收穫祭
十月四日(土) ちよつくらふれ旅
(秋) (予定) く栗拾いと里山散策
と森のご馳走ランチ
その他、計画中です。
人は自然の中にいる時が一番自然でいられるものです。里山はその自然がいっぱい存在している場所です。一度遊びにいらつしやいませんか。

末松登志子

宝古高取内ヶ磯窯からです。出土品・伝世品共に注目できるのは叩き板おこし成形の茶釜型と樽型の水指でこの中には紙のような薄さのものまであるのです。叩き板おこし成形というものは、粘土を棒状にしたものを輪積みしたものを内側に中コテを入れ外側からコテ板で叩いて薄く伸ばす成形技法です。

内ヶ磯の高取焼きが運ばれていた京三条には、鎌倉時代末期から茶湯釜の製造を専らにした鋳物師の座が置かれていました。その京三条を拠点としていた陶器商で陶工でもあった別所吉兵衛の伝書に気になる職人が一人いるのです。

それは、竹屋源十郎という陶工で次のような記述です。「竹屋源十郎・・・茶の湯柄杓茶杓其外道具商、東六条に住す小細工などよく仕り遠州御意に入 伏見両替町裏に窯を立て茶入を焼園焼と云ふ 土は信楽にて取り焼く」

(小田栄作氏写本)

この記述で注目すべきは、源十郎は「竹屋」で竹細工の「柄杓茶杓」以外に茶の湯に無くてはならない道具を扱う「道具商」であるということ。「茶入」「茶釜」も扱う人物であるということです。そして「小細工などをよくする」こ



伝世品の樽型水指

と、すなわち器用な陶工で「遠州のお気に入り」であること、さらには、「遠州の屋敷（両替町）の裏に窯を立てて茶入を焼いていた」ことまでが先ずは、注目すべき内容です。そして源十郎は、京都在住で茶道具商ということは、京三条の鋳物師の釜作りを目の当たりのできるだけでなく、鋳物師に釜の形まで指示して作らせることができるポジションにいた人物ということになります。

昭和六十年十月に「源十郎は薄作り」という京陶工の伝承を表千家教授加藤淡斎先生から伺っています。また、内ヶ磯窯で焼いていた薄作の釜型・樽型の水指の中には成形・焼成実験の結果、信楽土を使用しないと焼造できないものが複数見られるのです。実験まで

行った分析・検証・考察の結果、高取焼の薄作りは限りなく「遠州お気に入り」の京陶工源十郎の手ほどきと推測できます。

補筆として『原色茶道大辞典』織部六作の項・・・（前略）古田織部が選んだ茶入作家六人。吉兵衛・新兵衛・江存・宗伯・茂右衛門・源十郎の六人をいう。織部窯で焼かせたという。」とあります。

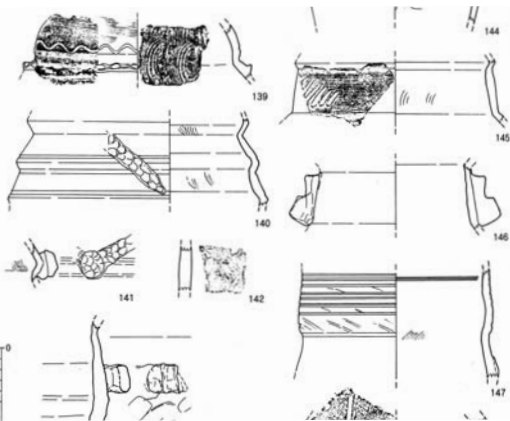
加藤淡斎先生から「源十郎は薄作り」という伝承を伺った時に、他にも京陶工の伝承として「茶器二印は別所吉兵衛」「茶器于印は有来新兵衛」「江存は酒造り」「茶器〇印は宗伯」「茶器十印は茂右衛門」「弥之助は大窯造り」と伺っていて、弥之助以外は、「織部六作」に記述されている京陶工です。

実は、ここに見られる印が内ヶ磯窯から全て出土し、福岡県教育委員会が発行した内ヶ磯窯跡発掘調査報告書に実測図として報告されています。そしてそれらが、すべて茶の湯の席で使われる器種に記されている事も判りました。ちなみに内ヶ磯窯が「天下一の織部の隠し大窯」であると言って差し支えない伝承を平成七年一月九日に陶芸の師匠備前二代目藤原楽山

先生から伺っています。



出土品の釜型水指



福岡県文化財調査報告書 第181集より

なんでも掲示板

●これでもいいのか明治医新

「商店街の活性化を願って

〈平成二十五年十一月十日(日)〉

場所…直方市明治町通り

昨年の十一月十日(日)、直方市明治町通りで、「明治医新」と銘うって、イベントが催された。私は中でも特に「古高取陶芸教室」のビデオを取るために、バイクでカメラと三脚を担いで会場に足を運んだ。カメラと三脚は重いのにな、近くに無料の駐車場はないので、バイクにした。ほとんどの催し物は十一時からだったが、通りはいつものようにガラ〜ンとして人通りはまばらだった。「親子でスポーツを」と呼びかけたバターゴルフの係りの人は誰も来ないので、手持ち無沙汰だった。定員二十人の「陶芸教室」に着くと、客の生徒は二人来ていて雑談に花を咲かせていた。三十分が過ぎ、ようやく四人になったところで講座が始まった。もともと「古高取」という名称は四百年前の永満寺窯と内ヶ磯窯の出土品に付けられた名前なのに、現代の陶芸教室にその名

前を付けること自体が間違っているけど、まあそれは見逃しておこう。先生は飯塚市八木山の陶芸家だった。それはともかくとして、先生は手際よく簡単なるくろを回しながら器の作り方を指導されていた。途中で、別会場の古高取展も見に行き、撮影した。戻ってみると生徒は六人となっており、最後に加わった若いお母さんが、しやれたコーヒークップを一番に完成させていた。そのそばで、小学四年生の子供さんが上手に作っているのをインタビュしながら撮ったのに、テープに残っていないかったのが残念だった。

その後、お茶席などに参加したりして、明治町をあとにした。

それにしても、十いくつもの催し物が企画されているのに、人通りはほとんどなく、寂しい限りだった。後に、企画したアイデアパートナーズKKに電話して、いろいろ聞いてみた。

そして、この催しが商店街の活性化に繋がるのだろうか疑問だけが残った。

商店街の活性化の最大の鍵は、無料の駐車場があるかないかだと思いますが、いかが。

千羽 登

紙面の都合でQ&Aは少しだけ紹介致します。

Q…宣伝用チラシには駐車場のことが何も書いてない

が、参加者の交通手段は何を想定されていますか。

A…明治町には無料の駐車場はないので、有料駐車場を書くわけには行かず、

書かなかった。だから、公共の交通手段を使って来てもらうことにした。

Q…このような企画をすれば、相当の費用がかかると思いますが、それはどこから補助金がおられるのですか。

A…全国商店街支援センターです。

Q…その資金は国から出るのですか。商店街の創業促進受託事業となっていますか。

A…いいえ、国からでなく、全国の商店街の協同組織からのようです。

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。

〈編集後記〉

今年は官兵衛ブームで直方市でも少しばかりイベントをやっています。先月は、RKBラジオが、黒田藩御用窯の高取焼発祥の地！直方市の福智山麓をタイムトラベル、と言うことで、永満寺宅間窯跡や高取焼永満寺窯などを訪れました。これからも直方発信に繋がるようなイベント等を期待しています。



高取焼永満寺窯からラジオ中継

「古高取通信」会報・NO17

〈発行〉

古高取を伝える会

〈発行日〉

平成二十六年七月十日

〈現在の会員数〉

正会員 六十三名(七十二日)
賛助会員 十三名(十九日)
団体 一団体(二日)

〈マイ茶碗の数〉

5271個

〈事務局〉

〒八二二〇〇二六
福岡県直方市津田町七十四
TEL 〇九四九(三三)一三二一